

7

エストニア語は どんなことば?

★エストニア語の発音や文法★

エストニア語	フィンランド語	日本語訳
Aitäh!	Kiitos.	ありがとう
Palun vabandust!	Anteeksi!	すみません
Mu ema elab Eestis.	Äitini asuu Virossa.	私の母はエストニアに住んでいる
Päike tõuseb aeglaselt.	Aurinko nousee hitaasti.	太陽がゆっくり昇る
Kas lähme õhtul kinno?	Mennäänkö illalla elokuviin?	今晚映画に行こうか
Siin on soe.	Täällä on lämmintä.	ここは暖かい

エストニア語のアルファベット

ABDEFGHIJKLMNOPRSŠŽTUVÕÄÖÜ

エストニア語の文字と発音

エストニア語はラテン文字で書かれるので、日本人が文字で苦勞することは基本的にない。ただし、英語のアルファベットに加えて、Õ õ Ä ä Ö ö Ü ü Š š Ž ž が使われる。これらの中には馴染みのある文字もあるが、アルファベットの順番にはエストニア語の独自性がある。たとえば、ドイツ語の辞書の見出しでは ä, ö, ü ではじまる語は、それぞれ a, o, u で始まる語に混じって並んでいるが、エストニア語では別の文字になっている。また、T の前に Z が出てくるアルファベットも珍しいのではないだろうか。

文字の読み方で注意したいのは、J が日本語のヤ行の子音を表すことだ。たとえば、haja-maja (家)、jani-yas (喉の渴き)。英語の Yes にあたるエストニア語は jah (Ja) だが、これは「じゃあ」ではなく「ヤー」である。

J はもともとラテン語では、母音文字の間で書くこと

エストニア語とフィンランド語は似ていない?

エストニア語はフィンランド語と姉妹語であるといわれる。この二つのことばは似ているか? という質問をよく受けることがあるが、私は「大して似ていない」と答えることにしている。よく似ているという答えを期待していた人は驚くが、嘘ではない。実際、基本的な表現が似ていないことが多いのである。たとえば、次頁の表を見ていただこう。

似てますか。フィンランド語がわかると豪語する日本人にエストニア語を聞かせて試したことがあるが、はじめてエストニア語を聞いた人は、一様にほとんど理解できないと言う。姉妹語だからといって、フランス語とスペイン語がどちらか一方の知識だけで他方もすぐにわかってしまう関係にないのと基本的に同じで、エストニア語とフィンランド語は一般に思われているほどは似ているわけではない。

姉妹語のフィンランド語とさえこんなに似ていないエストニア語だから、隣国で話される系統の違うロシア語やラトビア語と似ている度合いは、韓国語や中国語が日本語に似ている度合いと大して違わないと思ってしまうのではない。

きのIの異体字に過ぎなかったもので、日本人の耳にヤユヨの子音として聞こえる子音で読む方がラテン文字の伝統をひく由緒正しい読み方で、日本人にジュと聞こえる読み方をする英語やフランス語は、国際的に見るとひどく訛っている。このことは、この際しつかり覚えておこう。一方、日本語のジャジュジョの子音は、エストニア語ではzまたはdzで表す。細かくいえば、zはフランス語のjの発音、dzは英語のjの発音にほぼ相当するので違うのだが、日本人の耳には同じに聞こえてしまう。エストニア語のzは、外来語で比較的よく使われる文字である。たとえば、*zain*「ジャンル」、*zaini*「審判員」、*dzass*「ジャズ」、*kolledz*「大学」など。

日本語のパとバ、タとダ、カとガのような子音の無声・有声の区別がないこともエストニア語の特徴だ。つまり、エストニア語の綴りのb, d, gは有声音を表していない。中国語のローマ字表記(併音)のb, d, gや、韓国語のローマ字表記の語頭のb, d, gの読み方(韓国語のb, d, gは母音間だと有声音バダガの子音になる)とよく似ていることにお気づきだろうか。たとえば、エストニア語の*dee*「考え」は日本語の「痛てえ」、*sage*「頻繁な」は「避け」あるいは「鮭」のように聞こえる。

中国の*Guangdong* (広東)を「ガンドン」と呼んだり、韓国の*hulgiog* (불고기)を「ブルゴギ」と呼ぶ日本人はまずいない。エストニアの地名や人名についても、同じように現地音を尊重するカタカナ表記が定着してほしい。たとえば、*Paide* パイテ、*Kadriorg* カトリオルク、*Kaido* カイトなど。韓国の「プサン」で「ギムチ」や「ブルゴギ」を注文しないのと同じに、エストニアの立法機関*Riigikogu*を訪問するときは「リーギコグ」ではなく「リーキコク」へ行行ってほしい。

参考までに、ふつうのエストニア人の耳には、「餓鬼」「鍵」「柿」が同じに聞こえる。これは、日本人には英語の*rub*と*love* (*rub you* は気持ち悪い)が同じに聞こえて区別できないのと同類の話だ。大相撲の把瑠都の名前*aido*はカタカナでは「カイド」と書いてあることが多く、力士名の「把瑠都凱斗」の漢字読み「ガイト」と食い違う。ただし、ふつうエストニア人の耳には、「ガイド」「ガイト」「カイド」「カイト」はみな同じに聞こえているはずで、本人はまったく気にしていないと思われる。

エストニア語と日本語は似ている？

二つの言語が似ていないというときは、同じような考え方で文を作れないという体験がもたれていることが多いように思う。たとえば、日本語は「ここは寒い」と言うのに、英語では(x) *Here is cold*ではなくて*It's cold here*。とか*I feel cold in here*。とか何とか言わないといけない。日本人に英語が難しいのはこういった点だ。ところがエストニア語は、この点で日本語と同じように言っただけな。

Siin on külm.
シイン オン キュム
ここである 寒い

この*siin*は英語の*here*にあたる「ここで」という意味の副詞だから、英語に直訳すると*Here is cold*である。また、「タリンからタルトまではバスで2時間だ」も、エストニア語に直訳できて

しまう。英語でもこの語順で通じないわけではないが、文法がアウトなので試験では0点になる。

Tallinnast Tartuni on bussiga 2 tundi.
タリンから タルトまでである バスで 2時間
(英語) From Tallinn to Tartu is by bus 2 hours.

さらに「あの家では子犬が2匹死んだ」は、エストニア語なら

Neil suri kaks kutsikat.
彼らの家で 死んだ 2匹 子犬

と直訳できるが、英語で (×) They died two puppies. と言おうものなら、文法がめちゃめちゃでなく、死んだのが家族なのか2匹の犬なのか紛らわしくなる。

このように、日本人が英語を勉強すると、文の主語の考え方の違いに戸惑うことが多いのに、エストニア語だと違和感がないことが多い。どうですか、みなさん、エストニア語を勉強してみませんか？

(松村一登)